# ひきこもりと男子高校生

藤波綾綺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ひきこもりと男子高校生

【Ｎコード】
Ｎ８５１１Ｗ

【作者名】
藤波綾綺

【あらすじ】
もともと短編でアップしていたものを連載することにしました。
ひきこもりたいけれど、ひきこもれていない大学生とひきこもりの野望を阻もうとする男子高校生らのお話。
「帰れっ」
「今日の晩御飯はなんですか？」
みたいなやりとりがデフォルト。はてさて大学生はひきこもりの野望を達成することができるのでしょうか？

## とあるひきこもれてないひきこもりの華麗なる一日（前書き）

短編でアップしていた「あるひきこもれてないひきこもりの華麗なる一日」を連載用に再アップしたものです。短編と同じですのでご注意ください。

## とあるひきこもれてないひきこもりの華麗なる一日

わたしは、ひきこもりだ。
とはいえ、あまりひきこもれていない。
残念ながら、わたしはひきこもり学に精通しておらず、ひきこもりにどのような種類があるのかわからないが、もしかしたら、わたしはひきこもりに分類されないのかもしれない。
しかし、わたしは自身をひきこもりだと思っている。
なぜならば、わたしはひきこもりたいからだ。

ひきこもりである、というと、なぜ、とよく聞かれる。
理由なぞない。
おそらく、そういう性質なのだろう。
他人が怖いというのもないし、いじめられていた過去がある、とかそういうわけではないのだ。

ただ、ひきこもりたい。それだけ。

それだけであるはずなのに、どうしてこうもひきこもれないのか。
わたしは世間一般的に自由な時間がいちばんあると思われている花の大学生である。大学生活を心からエンジョイしている。エンジョイの仕方はどうあれ。
わたしはひきこもりではあるが、外に出るのが怖いというわけでもなく、親に学費を支払っていただいている以上、授業にはきちん

と出席する。2年までは教養などあまり興味のない授業もカリキュラムの関係で受講せねばならなかったが、3年の今となっては専門ばかりでいいので大変すばらしい。大学とはよいところだ。

しかしながら、授業に出るためには外にでらねばならぬ。
よって、授業のある日はひきこもれない。
ひきこもることはわたしにとってある種の野望であるから、授業のある日は野望を達成できないということになってしまう。
いたって、残念だ。

授業は勿論、毎週開講されるものばかりであるから、基本的にはひきこもれない、という結果になる。
そこで、長期休みにひきこもればいいではないか、とわたしは考えたのである。我ながらいい考えだ。

ところが、だ。
わたしのひきこもるという崇高な野望を阻止しようとたくらむ奴が現れた。

「帰れっ」
「いやですよー。それより早く中に入れてください。僕、暑いのに弱いので熱中症になりますよ」
「暑いのに弱いならなおさら帰れっ、というか来るなっ」

わたしは玄関を前に、一人の男子高校生と対峙していた。いや、男子高校生を退治していた、という方が正しいかもしれない。
何をとち狂ったのか、この男子高校生、毎日夕方私の家を訪れるのだ。あのとき、余計な仏心など出すのではなかったという後悔は今更だ。

そもそものきっかけは、わたしがひきこもり生活を本格的に始めよう準備し始めたことによる。
わたしも曲がりなりにも大学生であるから、夏休みであっても勉強はせねばならぬ。しかし、大学に行かなければならないということはなく、一人暮らしの家で十分勉強できる準備を整えた。

次にしなければならないのは、食糧の調達である。
ひきこもっている間に病気になり、病院にでも運ばれたらお話にもならない。そうならないためには、食糧は必須である。青物の野菜は熱を通して冷凍しておけばいいし、その他の食材もまた然り。一人暮らしを始めるにあたって、5人家族用の冷蔵庫を無理して買っておいてよかったとこんなとき思う。これで十分、保存できる。
保存スペースが確保できたならば、買い物をせねば、ということであれこれ買い物に出かけ、大袋をいくつもさげて帰宅する途中だった。彼が青い顔をしているのを見かけたのは。

わたしはその日、いつになく気分が良かった。
それはそうだ。ようやくひきこもれると思っていたのだから。
だから具合悪い人にちょびっとぐらい親切にしてやろう、という気分になったのだ。

わたしは、男子高校生に声をかけた。
男子高校生がいたのは小さな公園のベンチで日が燦々とさしてる。大学の夏休みがお盆に始まることを考えれば、季節は当然、夏。しかも暑い。
少年と青年の間くらいの男子高校生は、本当に具合が悪そうだった。だから、手に持っていたゼリーを作るつもりで買っておいたりんごジュースのペットボトルを彼に渡し、少しだけ待っているように伝えた。とりあえず両手に持っている荷物をどうにかせねばならなかったし、家はすぐそこだったからだ。
ダッシュで家に入ると、食材をそのまま玄関において、そのままま外に出る。買い物に行く前にクーラーを入れてきたから、食材がすぐに腐るということはあるまい。

わたしが再び、公園に戻ったとき、彼はまだそこにいて、ぼんやりとりんごジュースを飲んでいた。
こりゃどうしたものか、と思って、救急車呼ぼうか、と聞いたら首を横に振るので、とりあえずうちに来い、と連れて行くことにした。彼の来ている制服から、彼が近隣の高校生であることがわかっていたので、救急車で運ばれるということは彼にとって恥ずかしいことかもしれぬ、と思ったためだ。わたしはこのときの自分の判断を呪いたい。そんな親切せずに、さっさと救急車に乗せてしまえばよかったのに。

それからだ。

その男子高校生に付きまとわれるようになったのは。

彼は近隣でも有名な進学校に通っていて、毎日課外授業があるらしい。その帰りになぜかうちに来る。そうしてご飯を催促するのである。ちょっと図々しすぎやしないか。

男子高校生は巽と名乗った。苗字なのか名前なのかは知らない。そこまでの興味はない。ただわかるのは、巽によってわたしの野望は達成できない、というわけだ。巽は進学校に通っているというだけあって、驚くほど頭の回転が良かった。

わたしがなぜ、巽にご飯を食べさせなければならないのか、とひそかに憤慨し、しかしそれを直接言ったところで、なんだかんだと言いくるめられてしまうに違いない、と搦め手で、

「親御さんが心配なさるだろう」

と、言ったときも、

「あ、親には先輩からいい家庭教師の先生を紹介してもらって、そこで勉強しつつ、ご飯ももらっていると言っています。そうだ、それで月謝も親からもらってますので明日渡しますね」

と、さらりと交わされ、

「金はもらえないよ」

と、言ったときも、なんだかんだとなぜか受け取る羽目になっていた。

わたしもそれなりに頭のいい方だと自負していたが、次元の違う人間とはどこにでもいるものだ。

そうして、今日も。

りーん、という心臓に悪い音がする。ドアチャイムの音だ。しかも奴はそれだけでなく、ドアをガンガン叩くものだからうるさくて仕方がない。そんなことをしたら近隣の迷惑であるというのに。

いや、もちろん、彼はそれが近隣の迷惑になるということを知っている。それでもなお、そのような行為に出るのは、そうすればわたしが彼のために玄関を開けざるを得ないということを知っているからだ。顔はきれいなのに、なんて奴だ。

そうして奴の思惑通り、わたしは玄関を今日も開けてしまう。

わたしのひきこもり生活はどこに行った？

## とあるひきこもれてないひきこもりの華麗なる一日（後書き）

見切り発車ですが、頑張ります。そんなに長くはならないんじゃないかと思いますのでよろしくお付き合いくださいませ。

## とある男子高校生の友人観察記　その１

俺の友人である藤堂巽という奴は、天に愛された存在だと思う。眉目秀麗、文武両道という言葉がまさに相応しい。天は藤堂に二物どころか三物、いや五物くらい与えたに違いない。俺もそこそこできる方だが、藤堂とは次元が違う。

要するに、上には上がいる、ってことだ。

さて、頭もよくて、スポーツもよくできるとなれば、性格はどうか、ということになる。

この点については注意が必要だ。なまじ、藤堂は頭が良い分、他人に自分がどう見えるか、きちんと理解している。それをわかったうえで行動しているから、彼の評判はすこぶるいい。しかし、それは藤堂の擬態に対する評価であって、藤堂自身の性格が良い、というわけではない。

藤堂の性格についてはおいおいまた述べよう。

とにかく、穏やかで誰にでも笑顔で接する藤堂は、みんなを平等に扱う。一部の例外はいるが、鉄壁の笑顔は他人が踏み込むのを許さない。穏やかな顔の下で何を考えているのかわからない、それが藤堂巽という男なのだった。

おおっと、自己紹介が遅れて申し訳ない。

俺の名前は栃木亮太。藤堂がその他大勢の扱いをしない貴重な例外なのでそこんとこヨロシク。ま、クサイ言葉でいえば親友という

やつかもしれない。そんなこんなで、「そんな大勢」よりかは、藤堂を理解していると自負する俺が、ここ最近の藤堂に起きた異変について少し述べたいと思う。

俺や藤堂の通うK学院は、ここらでは名の知れた進学校である。いまどき、男子校ってどーよ、と思うんだけど、OBらの強い反対があって、共学にはまだなっていない。異性がいたら勉強に集中できないというのが、共学反対の理由らしいけど、まったくアホらしい。

K学の周りには、女子高や共学の高校がいくつもあって、合コンとかもしょっちゅうだ。しかも、「K学院生」というのはちょっとしたブランド扱いされているから、合コンにさえいけば、彼女なんてすぐにできる。

だから、異性云々というのはあまり説得力のある理由とはいえない。

うちの高校で誰がいちばんモテるか、といえばそれは当然藤堂だ。しかし、藤堂は、どんなに可愛らしい女の子に告白されてもOKしたことはない。

不思議に思って、なぜ誰とも付き合わないのか、と聞いたことがある。

藤堂の答えは、「僕はアクセサリーじゃない」だった。言いえて妙だ。

藤堂に群がる女の子たちは、「眉目秀麗、文武両道な藤堂巽」という存在が欲しいのであって、それは生身の「藤堂巽」ではない。もともと人嫌いな気のある藤堂のことだから、告白されても嬉しい

ものではないらしい。

そんな藤堂が、最近妙に嬉しそうなのである。

いつも微笑んでいることが多いとはいえ、感情が伴っていることは少ない。それなのに、ここのところ藤堂は何か楽しくて仕方がない、という風なのである。これは大変珍しいことだ。

本来ならば、今は夏休み。男子高校生としては、ナンパしたりだとか、バイトして馬鹿やったりとかいろいろすることがあるはず。時間は一秒だって惜しい、はずなのに。うちの高校はみっちり課外が入っている。夏休みなのに、まったくもって夏休みではないのだ。藤堂に至っては授業自体がつまらないらしく、先週の中ごろまではちょっぴり不機嫌だったのだ。

それが、なぜか。

最近は課外が終わると同時にさっさと帰る。しかも課外終了が近づくとそわそわしているのがもろわかりだ。ま、そんなのに気づくのは俺くらいだろうけど。

でも、気になるだろう？

気になることはとことん！を合言葉に俺は藤堂の後をつけることにした。

そうして聞こえてきたのは、怒声。

「帰れっ。わたしの邪魔をするな」

「暑いので早くなかに入れてください。熱中症になってまた倒れま

す。ちなみに今日の晩御飯はなんですか～」

声のした方へ行くと、そこにいたのは間違いなく藤堂と見慣れない女の人だった。女の人は明らかに迷惑そうにしているのに、それをものともせず、強引に家の中に入っていく藤堂。面白くなりそうな予感がする。

藤堂が家の中に入ったのを確認してから、俺は藤堂が入っていった家を訪ねることにした。

「りーん」

古くはないけれど、木造アパートの呼び鈴はよく響く。呼び鈴の音にびっくりしている物音が聞こえ、すぐにどちら様ですか、という声が聞こえた。

「えーと、そこにいるあなたがおそらく邪魔だと思っている友人を引き取りに来た者です」

すぐさまがちゃりとドアが開いて、

「さっさと引き取ってください」と藤堂を突き出された。

「お前、なんでこんなとこいるんだよ」

不機嫌まっしぐらです、といわんばかりの藤堂。こんな自分の感情に素直な藤堂なんて見たことがないからおかしくてたまらない。

「だって、お前、最近おかしかったろ？だから尾行してみた」

えへ、とでもいいそうな顔で言ってやれば、本気で嫌がられた。しかし、藤堂が再び口を開く前に、家主であろう女性が口を開いた。

「あなた方がどういう関係であろうとわたしには興味もないので、さっさと引き取ってかえってください」

「えー、だって、今日夕食は先生のところで食べてきます、って親に言っちゃったから、僕、家に帰っても食べるものないんですけど。そうしたらまた倒れますよ？それにこんなとこで話してたらおとなりさんにいろいろ筒抜けになりますけどいいんですか？」
「くっ、卑怯な。夕食なら迎えに来てくれた友達とでも食べにいけばいいだろう。ついでに男子高校生が何度も熱中症で倒れるな」
「そうしたいのはやまやまなんですが。それより、玄関開けたままだとせっかくクーラーつけてるのに、意味がなくなりますよ？」
「ええい、もうわかった。さっさと入れっ。その友人とかもだ！」

こうして、俺はひきこもりたいという野望を持つ小西奈々枝女史と知り合いになったのだった。

## とある男子高校生の友人観察記　その１（後書き）

ようやくひきこもりたい人の名前が出せました。やれやれ。

## とある男子高校生の友人観察記　その2

「はじめまして、栃木亮太と申します。りょーちゃんでもりょうくんでもお好きなように。ちなみにそこにいる藤堂とはクラスメイトです」
「小西奈々枝だ。この男は藤堂が苗字か？」
「ええ、そうです」
「そうか」

俺と奈々枝女史が話していると、藤堂が小声で余計なことを、とつぶやいているのが聞こえた。これから背後には注意しよう。女に刺されたら勲章だけど、男に刺されるなんて冗談じゃない。

小西奈々枝女史という人はおかしな人だった。
近所にある国立大学の3年生だと名乗った彼女は、ひきこもりになりたいらしい。いや、なりたいというのはちょっと違う。自分はひきこもりだが、なかなかひきこもることができないので、長期休暇くらいはひきこもりたいのだが、この藤堂とやらが邪魔をするのだと彼女は語った。

「邪魔をしてるわけじゃないよ。現に奈々枝さんはこの家からでてはないじゃない。食材だって食べた分は僕がスーパーで買ってきてるでしょ？十分ひきこもれてるよ」
「違うっ。いや、世間には家からでなければ十分ひきこもりだと考えることもあるのかもしれんが、少なくともわたしの考えるひきこもりとは違う。よって、野望は達成していない」

奈々枝女史のしゃべり方は独特だ。声自体がハスキーなことも相まって顔を見なければ男性のようにも聞こえる。やがて、奈々枝女

史は藤堂を説得するのを諦めたのか、冷たいアイスティーを藤堂と俺の前に置き、それを飲んだら帰れ、と言った。

「ところで、栃木くんとやらはこの男の同級生と言ったな？クラスメイトなんだよな？」

「ええ。そうです。出席番号も前後ですよー」

「ふむ。ならば図々しいお願いかもしれないが、この男がうちに来ないよう首根っこをつかんでおいてはくれないだろうか。この男のせいで、わたしはひきこもり生活ができていないのだ」

「その前に、奈々枝さんはどうしてひきこもりたいんですか？」

隣で藤堂が奈々枝さんとか呼ぶな、とかなんとかわめいているが無視。まずは、奈々枝女史がなぜ、ひきこもりたいのか聞くほうが優先度が高い。こんなに面白そうなことなんてめったにない、と俺の本能が告げているのだ。

「理由なんぞないよ。ただ、わたしは自分がひきこもりであるとわかっているし、ひきこもっている方が性に合っているんだ。けれど、わたしは大学生であり、授業料を親に支払ってもらっている限りは、まっとうな大学生活を送る義務があるし、それが嫌だというわけでは決してないのだ。わたしはわたしなりに大学生活というやつをエンジョイしているからな。ただ、それとは別にやはりひきこもりたいという願望がある。その願望を実現するには、長期休暇というのはもってこいなわけだ。昨年まではいろいろあってひきこもることができなかったので、今年こそは、と万全の準備をして長期休暇に臨んだのだが、この男が」

と、奈々枝女史はそこで言葉を切って、憎々しげに藤堂を見た。

「それは僕のせいじゃないでしょう。僕だって、好きで熱中症にな

っていたわけじゃないよ。たまたま、だって」
「別に熱中症になっていたのが悪いというわけではない。人間である以上、そういうこともあるだろう。しかし、そういうことじゃなくて、なぜ、まだ藤堂とやらはうちに来るのかということだ。もう用事はないはずだろう」
「藤堂じゃなくて、いつも通り、巽って呼んでよ」

なんだろう、言葉だけ見れば、すごくバカップルっぽいのに、俺からすれば、犬嫌いなんだけど友人に頼まれてしぶしぶ犬の面倒を見ている仮飼い主と大型犬にしか見えない。

なんて面白い組み合わせだろうか、と俺は思った。藤堂がここまで年相応に見えたのはもしかしたら知り合って初めてかもしれない。

「確約はできませんが、善処します。でも、藤堂はすごく優秀なのでいろいろ使い勝手はいいと思いますよ？」
案にこき使ってやればいいじゃないか、と伝えると奈々枝女史はいらん、と一言で切り捨てた。

「この男が優秀なのはまあ、そうなんだろうが、わたしには不要だ。わたしはわたしに満足しているし、助けが必要になれば、助けてくれる友人もいる。それにまだ藤堂は高校生だろう。高校生に重荷を背負わせるのは本意ではないよ」

その言葉を聞いて、おれは、ああ、だからか、と納得した。
この人のそばでなら藤堂は背伸びする必要もないし、わがままを言ってもいいのだ、と。わがままを言って叶えてもらえるかどうかは別として、わがままを言ったからといって、見捨てられることもあきれられたり失望されたりすることもない。それは、奈々枝女史が自分に満足しているからだ。藤堂に頼る必要なんてないからだ。

面白い、本当に面白い。
藤堂が奈々枝女史に対し、どういう感情を持っているのかは定かではない。ただ姉のように慕っているだけかもしれないし、恋愛感情なのかもしれない。ただ、居心地のいい場所と認識しているのは間違いないだろう。

「奈々枝さんの夏休みはいつまでですか」
「うちは案外遅いから、１０月から後期授業が始まるな。それまでは休み、というやつだ」
「だったら、こうしませんか？俺らは一応９月の頭から新学期なんです。だから、あと２週間くらいで夏休みは終了。その間に奈々枝さんがこいつを諦めさせれたなら奈々枝さんの勝ち。９月は一切奈々枝さんの邪魔をせずに、快適なひきこもり生活をお約束します。こいつを近づけさせたりしません。だけど、８月中に藤堂を説得できなければ、ここに来ることは許してもらえませんか？奈々枝さんにとっても悪くないでしょ？」
奈々枝女史は一度目を閉じてから、深く息を吐いた。

「それは藤堂にとって、かなり有利だし、わたしにとってあまりメリットになるとは思えないんだが、今のままでは藤堂は納得しないんだろう。だったら期限を区切るというのはいい提案と言わざるを得ない。藤堂もそれでいいか？」
大人しく俺の提案を聞いていた藤堂も、少なくとも８月中はここに来てもいいということになったのだから、喜んで首を縦に振った。

「ただし、だ」
と、奈々枝女史。
「わたしは案外疑り深い。そこで一筆書いてもらいたい。栃木くんは立会人ということでいいかな？」

「ええ、もちろん」

こうして、奈々枝女史と藤堂の本格的な攻防戦が始まったのだった。

## とある男子高校生の友人観察記　その２（後書き）

見直しをしていないので間違いがあるかもしれません。その場合は書き直すので教えてください。これでようやく本格的な攻防へと入ります。やれやれ、です。

## 攻防戦　その１（前書き）

今日の晩御飯はエビフライでお願いします、な藤堂とふざけるな、な奈々枝。はてさてどちらに今日は軍配があがるのやら。

## 攻防戦　その１

小西奈々枝は読んでいた本から顔をあげ、時間を確認すると深いため息をひとつ吐いた。

先日、よくわからない勢いで知り合った男子高校生に立ち会ってもらい、藤堂とひきこもりの野望達成のための賭けをしたのだが、藤堂を言い包めるにはどうすればいいのか、さっぱり浮かんではこなかった。

そろそろ時計の針は１５時をさそうとしている。

藤堂らの課外が終わるのは１４時半。そこからスーパーなどに寄って藤堂が奈々枝のうちに到着するのが１５時過ぎ。もうすぐ、あの心臓に悪い呼び鈴の音がして、奈々枝は藤堂を迎え入れねばならないのだろう。全くなんてこったい。

予想通り、１５時過ぎ。心臓に悪い呼び鈴とともに、藤堂は顔を見せた。

「こんにちわ、奈々枝さん。今日の晩御飯はねー、エビフライがいいなと思って、材料いろいろ買ってきてみた」

「毎日、遠慮がなくなっていくような気がするのは、わたしだけか？」

「まさか。それは奈々枝さんの気のせいだよー。だって、毎日何作ったらいいか悩む、ってニュースで主婦が言ってたからその負担をなくしてあげようと思って」

「いらんわ、そんな気遣い！」

しかもエビフライなんて、また面倒な、と奈々枝が思っている横で藤堂は何が嬉しいのかにこにこしている。

「なんだか新婚さんみたいだよね」
奈々枝は藤堂の言葉をさっくり無視して、藤堂が買ってきた食材を冷蔵庫に詰めていく。じゃがいもがそろそろ芽が出そうになっているから、ポテトサラダを作ろうか、それともコンソメの素でスープにするか悩むところだ。

奈々枝が冷蔵庫の中身とにらめっこしてる間に藤堂は手を洗って、座卓の前に座った。そうして学校のカバンから教科書などを出している。今から本気で勉強するつもりはないものの、家庭教師とい名目で親に奈々枝の家によることを許可してもらっているため、一応、ポーズとして勉強するフリはするつもりらしい。親に見えるわけでもないのに、妙なところで律儀な男である。

「なぁ、藤堂」
やがて冷蔵庫とのにらめっこが終わったのか、それとも単純に面倒になったのか、いつの間にか奈々枝が藤堂の前に座っていた。座卓には二つアイスティーが置いてある。藤堂は喉が渇いていたので遠慮なくそれをもらうことにする。

「んー？このアイスティーおいしいね、ありがとう」
「そうだろう、そうだろう。わたしが朝からミネラルウォーターを使って用意していたものだからな。というか、それはまあさておき、だ」
「うん」
「藤堂は親に家庭教師をしてもらっている、と言って、ここにきているのだろう？だけど、勉強なんてわたしは教えていないし、藤堂もわたしに教えてもらいたいとは思ってないだろう？つまりはご両親に嘘をついている、というわけだ。ご両親に養ってもらっている

以上、わたしのところに来る時間を、塾に行くのにあてるとか、本物の家庭教師に見てもらうということをすべきで、うちに来るべきではないよ」
「えー、まあ、親に養ってもらってるのは本当だけどさー。だったら奈々枝さんが僕に勉強を教えてくれるなら別に問題ないじゃん」
「東大の理？狙ってるやつに教えられるわけないだろう。だいたい、わたしは文系なのに」
「理系に行くからって理系を習う必要はないじゃん。むしろ、理系が得意だからこその進路だし。理系に進むから理系を習うっていうのは偏見だなぁ」
「うっ」
奈々枝は少しひるんだ。と、いうよりも、「家庭教師」という名目で藤堂は奈々枝の家に来ることが許されているのだから、家庭教師なんてしていないじゃないか、といえば藤堂は納得してひきこもりの邪魔をやめてくれるかもしれないと安易に考えていたのだ。そもそも、そのくらいで説得されてひきこもりの邪魔をやめるような男ならば、最初からひきこもりの邪魔をしようとはしないはずである。そのことをすっかり忘れていた奈々枝である。

うっ、と言ったまま固まってしまった奈々枝を見て、この人大丈夫かなぁ、と藤堂は思っていた。頭はいいのにどこかというか基本的に抜けている。お人よしというのもあるかもしれない。だから僕みたいな人間に付け込まれるんだ、という忠告は心の中だけにしまっておいて、それよりもさ、と弾んだ声を出した。

「それよりもさ、なんで奈々枝さんは日本文学を専攻しようと思ったの？」
「んぁ？ああ、なんだったかな。正月かなにかですごく暇だったんだな。だから普段は見ないテレビをぼんやり眺めていたら」

目に飛び込んできたのは、華やかな袴を着こなす二人の女性と近江神宮の一室だった。
あのときの衝撃は今でも忘れられない。

「かるたのクイーン戦ってやつがあってたんだ。というか、ちょうど始まるところでな。で、まず序歌というのが詠まれるわけなんだが、それがひどくうつくしいもののように聞こえたんだ」

なにわづに　さくやこのはな　ふゆごもり　いまをはるべと　さくやこのはな

意味などはわからない。しかし、言葉の響きにひどく心惹かれた。
「まあ、普通なら競技かるたに興味を持つんだろうが、わたしの場合、かるたという競技よりも日本語に興味を持ったんで、それならそれを専攻しようと思ったというわけだ」
「ふぅん、なんか奈々枝さんらしいよね」
「そうか？」
「うん」

きっと、奈々枝は好きなものを追いかけるのに、理由がなくてもただ「好き」というだけで追っていけるのだ。それが少し、藤堂には羨ましく感じられる。

奈々枝は自分が日本文学を専攻するきっかけを話したのが思いのほか恥ずかしかったらしく、夕食は、などと言いながら台所へと向かっている。先ほど、藤堂がスーパーで買ってきた材料を並べているから、この分だときっと藤堂のリクエスト通り、エビフライを作ってくれるに違いない。夕食が楽しみだ。

まずは藤堂の勝ち。

## 攻防戦　その2

先日は、うっかり恥ずかしくなってしまって藤堂のリクエスト通りエビフライなんぞを作ってしまったが、今日こそ、と奈々枝はこぶしを握った。

しかし、どうすればあの男にひきこもりの邪魔をされずに済むだろうか、といろいろ考えてはみるけれど、どれもピンとこない。

口で説明するっていうのもなぁ。

はぁ、と奈々枝は大きなため息をひとつ吐いた。

藤堂は高校生だというのに、高校生だとは思えないくらい口達者で頭の回転もすこぶる良い。下手するとこっちが混乱しているうちにあっさり丸め込まれてうやむやになってしまうこともあり、年下だからと馬鹿にしてはいられないのである。

要は、家の中に藤堂を入れなければいいのだ。玄関を開けてしまうから問題なのであって、玄関を開けずにいればいい。

と、そこまで考えて奈々枝はいそいそとメモ用紙とセロハンテープを取り出した。

＋＋＋

「今日もあの人の家に行くのか？」
「当然。でもその前にスーパーに寄るけどね」
「勝てる見込みは？」
「どっかの誰かさんが大人しくしといてくれるなら十分見込みあるよ。負ける気ないしね」

貴重な昼休みにそんなことを聞けば、可愛くない答えが返ってきた。
藤堂としては賭けに負けるなんてことはありえないんだろう。栃木の提案した賭けにあっさり乗ったということは、勝算があった、ということだ。藤堂が負けるかもしれない賭けに乗るなんてことがあったらそれこそ天変地異の前触れだ。

「それに、奈々枝さんの雰囲気も最近優しくなったし」
そんなことを臆面もなく言ってのける友人に栃木はごちそうさま、と言いたくなる。あんなに恋愛には興味ありません、という顔をしていたのに、これは俗にいうノロケというやつなのだろうか。

「あんま、やりすぎんなよー」
「わかってるよ。あの人ああ見えて結構繊細だから、たぶん、やりすぎると本気で拒絶されると思うんだよね。それだけは避けたいし」
「ずいぶん、入れ込んでんだな」
「まあ、そうかもね」
「そこまで入れ込む理由は？」
「さぁ、と言いたいところだけど、ごまかされてはくれないんだろ？」

「そりゃー、気になるからな」
「特別な意味があるとかじゃないよ。この先どうなるかは置いといて。ただ、あの人、すごく自然体だから楽なんだよね」
「それはなんとなくわかる気がする。あの人、あんまり他人に興味がなさそうだもんな。いい意味で」
「そ。自分に興味ないことは完全に意識から除外されてるから。下手すると同じ空間にいることすら忘れられてるよ」
「それが楽だ、と」
「そういうことだね」

そういうもんなのかもしれないなー、と栃木はひとり納得する。
藤堂というのは無駄に目立つ。顔がいいとか頭がいいとかそういうのとは別に、存在感があるというのかいるだけで華があるのだ。
だからどこにいても注目を浴びる。藤堂のことをよく知らない人間でも、つい目がそっちにいってしまうのである。それが当たり前だから藤堂も慣れてはいるのだけども、疲れることもあるのだろう。
どちらにせよ、友人が楽しそうなのは何よりである。機嫌が良ければ宿題を写させてもらえる確率も上がる。
こりゃ楽しみが増えたな、というのが栃木の本音なのであった。

＋＋＋

「よしっ」
奈々枝は「今日はいないので大人しく帰宅するように」と書いたメモ用紙を玄関に貼り付け、満足そうに笑った。
奈々枝がいなければ藤堂だって大人しく帰るに違いない、というのが奈々枝の狙いだった。食材を買ってくる可能性もあるのだが、それは家に持って帰ればいいのであって、問題にはならないだろう。

ふふふふん、と思わず鼻歌を奈々枝が歌っていると、階段を上がってくる足音がした。さすが木造アパート。音がよく響く。

奈々枝はじっと息を押し殺し、座卓の前に座っていた。日光に当たるのが嫌いな奈々枝は普段からカーテンを閉めていることが多い。一級遮光のカーテンだから外から見ても奈々枝が家のなかにいるのは見えないだろう。単に日光嫌いでカーテンを閉めていただけなのだが、思わぬところでいい結果をもたらすものだ。

息をひそめること数十秒。
りーん、と聞きなれた心臓に悪い音がした。
奈々枝はますます息をひそめる。息をひそめたとしても、そもそも呼吸音なんて外に聞こえるわけがないがそれは気分だ。
反応しない奈々枝に焦れたのか、もう一度、りーん、と心臓に悪い音がして、そのあと、コンコンとドアをノックする音が聞こえた。

「あちゃー。いないのかー。しょうがない、で帰るとでも思った？奈々枝さん、出てこないと奈々枝さんの恥ずかしいアレコレを言い触らしちゃうよー。あることないこと言っちゃうよー。例えばぁ奈々枝さんの」

奴は、やる。と奈々枝は恐怖した。
藤堂と知り合ってからそんなに日は経たないが、彼ならばもっともらしい嘘をもっともらしく言うだろう。ドアを隔てた部屋のなかでこれだけはっきり聞き取れるということは、ご近所さんにもはっきり聞こえるということだ。

「それだけはやめろー」
ドタバタと走ってドアを開けた向こうには、にっこり笑った藤堂がいました。

「こういうこと、二度とやらないよね？」
笑顔で疑問形なのに、とっても怖い。奈々枝はうなだれるしかなかった。

またもや奈々枝の負け。

## 攻防戦　その３

よし、今日はこのネタでいこう、と奈々枝はほくそえんだ。

いつも通り、１５時過ぎ。心臓に悪い呼び鈴がなり、藤堂が顔を出した。

そうして晩御飯やあれこれちょっとした世間話をするのもいつものこと。

それがひと段落してから、朝から仕込んでおいた水出しアイスティーを飲み、奈々枝はよし、と切り出した。

「ところで、だ。毎日、藤堂はここにきてるだろ？」

「巽でいいってば」

「呼び方はともかく、わたしはひきこもりたい。ひきこもることで健康で文化的な最低限度の生活を送りたいと考えている。ところが、だ。藤堂はそれを邪魔している状態だ。ということはつまり、藤堂の行動は憲法違反、というやつだな」

うん、我ながらなかなかいいことを言った、と奈々枝は思ったが、そもそもひきこもることが健康で文化的な最低限度の生活といえるのかどうか不明である。

「憲法は我が国の最高法規だから、国民はそれを遵守する義務がある。しかし、藤堂は今のところそれを守っていない状態だから、ここに来ることは許されないというべきだ」

「うーん、奈々枝さん。話を難しくしたいのかもしれないけれど、そもそもその健康で文化的な最低限度の生活は憲法２５条でしょ？あれってプログラム規定説とかで具体的権利性を持たないんじゃな

かったっけ？ついでにいうと、僕と奈々枝さんはどっちも私人だから、憲法の適用はないと思うよ。確か私人間効力（しじんかんこうりょく）とかいう問題だよね」

「むっ」

若干、旗色が悪くなるのを感じたが奈々枝はひるみそうになった自分を叱咤して、なお言葉を紡いだ。

「確かに、わたしと藤堂は互いに私人であるから憲法が直接適用されるわけではないが、間接的に適用されることは間違いない。とすると、私人の一般法は民法だから、民法の一般条項に基づいて憲法適合性は判断されるということだ。民法９０条によると、公の秩序又は善良の風俗に反する事項を目的とする行為はしてはならん、と規定してあるから、藤堂がここに来るのもいかん、というわけだな」

「奈々枝さん、条文は正しく理解しようよ。民法９０条は公序良俗に反する事項を目的とする法律行為が無効なだけで、僕が奈々枝さん家に来るのは別に法律行為じゃないでしょ？だったら無効も何もそもそも９０条の適用はないよ。それに」

と、そこで藤堂は一度言葉を切って、にこりと笑った。

「私人間において憲法が適用されるか、について間接適用説だと今までいわれてきたけど、本当は無効力説なんじゃないか、っていう説が今は有力なんじゃなかったっけ？」

「うっ」

今度こそ、奈々枝は何も言い返すことができなかった。

頭のなかはパニックである。

なんで高校生が私人間効力とか間接適用説とか知ってるんだ！無効力説が台頭してきたのはここ最近のことだし、憲法学会だぞ？普

通の高校生は憲法の学説なんぞ知らないだろ！

さらに追い打ちをかけるように、藤堂は続ける。

「奈々枝さんが参考にしてるのって三菱樹脂事件判決だよね？結構古いよね」

なんでおのれは事件名まで知ってるんだ、と奈々枝は激しく心の中だけで突っ込んだ。

私人間における憲法の適用について激しく争われたのは確かに、三菱樹脂事件と言われている事件で、下手すると藤堂が生まれる前の判決だ。

大学生らしく、難しい言葉だとか理論を出して煙に巻いてやろうと思っていたのに、これでは台無しではないか。というか藤堂は本当に高校生なのだろうか？高校生で私人間効力が、なんていう人間胡散臭くてたまらない。

奈々枝の胡散臭いものを見るかのようなまなざしに気付いたらしい藤堂は、何を疑っているのか知らないけど、と言った。

「何を疑っているのか知らないけど、僕はれっきとした高校生だよ。私人間効力とかはちょっと憲法で調べたいことがあって、それでつい最近読んだことがあっただけ。私人間効力ときたら三菱樹脂事件は絶対出てくるでしょ？」

「それはそうだが。というか、高校生が憲法を調べるとかいうのがまず信じられれん！」

「そこからなの？いや、僕だって調べたくて調べたんじゃなくて、授業でそういうのがあったんだよ？」

「憲法とかいう授業はないだろう」

「ないけど。そういうのじゃなくて、奈々枝さんのときはなかった？総合学習とかいうやつ。あれだよ、あれ」
「そういわれてみれば、なんかよくわからない調べもの学習というやつがあったかもしれん。でも憲法とかそんな難しいのではなかったぞ？」
「うちは一応進学校ですから。そういう難しいことだってやってますよー、ってアピールしてるわけ」

ね、と藤堂は笑うがいまいち信用ならない。それに、仮に高校でそういう授業をやっていたとしても、私人間効力なんてマニアックな問題は取り上げないのではないだろうか。
そういう問題を取り上げるには教師陣がある程度、知識があるか、下準備をしておかなければ、生徒たちが調べたことが正しいとはわからない。さすがに間違いがあるような場合は教師陣はそれを訂正する必要だってあるだろう。

なおも不信の目で藤堂を見る奈々枝に、藤堂はそんなことより、と言った。

「とりあえず、僕らが私人間効力とかについて学んだかどうかは置いといて、結局さ、奈々枝さんは憲法２５条が云々というけれど、僕と奈々枝さんは私人同士だから憲法の適用はちょっと難しいし、ひきこもりが健康で文化的な生活だ、っていうのは難しいと思うんだよね。そうなると、別に僕のやってることは憲法違反でもなんでもないってことだよね？」

にっこりと笑う藤堂。その笑顔が胡散臭いのだと奈々枝は思うけれど、藤堂の言うことはもっともでもある。

しぶしぶ奈々枝がそうだな、と返すと、ふふ、と藤堂は嬉しそう

に笑った。

「嬉しそうだな」

「うん。そりゃ嬉しいよ。偏差値とか模試とか関係ない話ができるのも面白いけど、これでまた奈々枝さん家に来ることができるんだなー、って思ったら喜ぶでしょ？」

「そういうもんか？」

「そういうもんです」

「ふむ」

とにもかくも、またもや藤堂の勝ち。

## 攻防戦　その3（後書き）

芦部信喜『憲法』第四版（高橋和之補訂版、岩波書店）と憲法判例百選（ジュリスト、有斐閣）を参照しました。
なんか最後がぶった切った感じで終わってますが、もしかしたら書き直すかもしれません。

## 攻防戦　その４

前回はうっかり藤堂の知っている分野での理論だったから負けてしまったけれど、今度こそ、と奈々枝は息巻いた。

「不法侵入だと思うんだ」
「は？」

藤堂はいつも通り、スーパーに寄って奈々枝の家を訪れていた。
前々日、居留守を使おうとしたことに対して重々釘を刺しておいたからか、スムーズに家の中にまでいれてくれるようになったのはよかったのだが、昨日と今日、待っていたのはなぜか自信満々の奈々枝だった。
へぇ、奈々枝さんもこんな自信満々な顔するんだなー、などとそんな感想を持つ前に、奈々枝はいきなり不法侵入だ、と不穏な言葉を持ち出したのだった。

「だからだなぁ、藤堂の行為は不法侵入罪の構成要件に該当する。そして違法性阻却事由もない。ついでに藤堂はすでに高校生だし、藤堂を道具として利用しようとしている間接正犯がいるわけでもないから、責任も阻却されない。構成要件的故意もばっちりあるから、刑法第１３０条にいう不法侵入罪の現行犯だな」
ふふん、とでも言いそうな奈々枝に藤堂は、そうかなぁとのんきな声を出した。
「まず、不法侵入罪の保護法益って平穏な生活でしょ？僕は確かに

奈々枝さんの家にお邪魔してるけど、お邪魔できるのは奈々枝さんがドアを開けてくれるからだよね。奈々枝さんがドアを開けてくれるから僕は玄関から奈々枝さんの家に入ってるわけだ。ってことは、奈々枝さんの平穏な生活を僕は侵害したりしてるわけじゃないから、不法侵入罪の構成要件には該当しないよね。つまり、不法侵入罪は成立しない、ってわけ。それに現行犯だって言うけど、こうやって喋ってる間に時間は経ってるから、現に罪を犯しとは言えないんじゃないかなー」

それに、と藤堂は続けた。

「現行犯だとしてもすぐに警察か検察に引き渡さないと、むしろ奈々枝さんの方が不当に僕を拘束したてことになるから、逮捕罪に該当するんじゃない？」

にっこり、とほほ笑む藤堂。

「なんっ、なんでお前はそんなことを・・・」

「いやぁ、単なる趣味だよ。昨日、奈々枝さんが憲法の話をしたでしょ？だから、ああ奈々枝さんは法律の勉強も大学でしてるんだろうなー、と思ってさ。そんで憲法の教科書の隣に刑法の教科書があったし、不法侵入罪のとこ付箋貼ってあったから今日はこのネタかなぁ、と」

「可愛くないっ」

「可愛くなくて結構。それに、だいたい男子高校生が可愛いなんてちょっとどうかと思うよ」

「なんで説得されないんだ」

「そんなこと言われても。それは奈々枝さんの説得が悪いからでしょ？僕のせいじゃないじゃん」

「ほんっと可愛くない」

「いや、だから可愛いとか言われてもうれしくないってば」

ふんっ、と拗ねる奈々枝を見て、藤堂はこの人ほんとうに大学生なんだろうか、と不思議に思う。

言ってることはしっかりしてるし、落ち着きもあるのにどこか子どもっぽい。子どもっぽいというよりも本能に素直に生きている、という感じだ。

そういや、最初、ひきこもりたい理由を聞いたときも、そんなものに理由はない、とか言ってたもんなぁ。理屈をあれこれこねるのは好きみたいだけど、自分の行動にいちいち理由付けはしないし、そういうことに興味もないんだろうなぁ。ますます面白いかも。こんな人もいるんだなー。

と、そんなことを藤堂が考えているとも知らずに、奈々枝はあれこれ頭のなかで使えそうな知識はほかにないかを考えていた。

難しいことを言えば、煙に巻かれるに違いないと考えていたのに、なんて奴だ、というのが奈々枝の感想である。奈々枝も不法侵入罪がどうこうと出してみたものの、あまり理解はしていない。とりあえず、不法侵入罪と聞いたなら一般の人はびっくりしてごめんなさい、となるに違いないと踏んでいたのだ。こういうところが甘いのだということに本人だけが気づいていない。

「奈々枝さんさぁ、そろそろあきらめない？」

「ん？何をだ？」

「ひきこもること」

「なぜ？」

「いや、ひきこもる理由ってこれといってないんでしょ？だったらひきこもらなくてもよくない？」
「ひきこもる理由ならあるぞ？ひきこもりたいんだ」
「それは理由というか希望でしょ」
「希望というより行動指針だな。しかも、ひきこもりなんて大学生の間しかきっとできない。いろいろな経験をするのは有用だし、今しかできないのであればそれこそやっておくべきだろう」
「え、ひきこもりの経験って有用なの？つか、それ単に自堕落なだけじゃん。なんか人に会うのが怖いとかそういう理由があるならともかく。別に外に出るのが嫌なわけじゃないんだよね？」
「暑いから嫌だ」
「それ、やっぱり自堕落なだけじゃん」
「いや、そうとも言えないぞ。わたしはな、少し日光アレルギーなんだ。日焼けするとだな、全身火傷になるから時として生命の危険があるんだな」
「は？それ、ふつうに生活できんの？」
「うむ。それほど重度のものではないから気を付けていればそうそう危険な目にあうことはないが。たまに忘れるとひどいことになる」
「だからひきこもってんの？」
「それとこれとは話が別だ。ひきこもっているのはひきこもりたいからで理由なぞない。だいたい、なんにでも理由があると考えること自体間違ってる」

きっぱりと言い切る奈々枝に藤堂は開いた口がふさがらない。
なんか、この人よく今まで生きてこれたな、というのが藤堂の自然な気持ちである。

やれやれ、と思いながらも、まあいいや、と考えることを放棄する。どうせ奈々枝さんが僕を納得させられるような理由を思いつけ

るとは到底想像できない。だったら、藤堂はその間、この面白い人を存分に観察することができるというわけだ。
それで十分だな、と結論づけた藤堂は自然な笑顔を作って、とりあえず、と言った。

「とりあえず、今日の理論で僕を説得させられなかったんだから、明日も来るね。スーパーで何か買ってきて欲しいものはある？」
「ふむ、仕方あるまい。そうだなあ、ちーちくを買ってきてくれ。あれ、好きなんだ」
「ちーちくね。了解」

こうして夏の日は一日ずつ穏やかに過ぎていく。

## 攻防戦　その４（後書き）

大谷實『刑法講義各論』第3版、成文堂　を参考にしました。
つか、現行犯逮捕して司法官憲に引き渡さなかった場合、逮捕罪が成立するかはわかりません。奈々枝が難しいことを言って煙に巻こうとしたので藤堂も同じように煙に巻いてみた感じです。
とりあえず、ぐだぐだな感じで攻防戦は進みます。

「あ、明日はわたし、本当に出かけるからまっすぐお帰りなさいね」

寝耳に水、だった。

＋　＋　＋

「よぅ。なんかシケた面してんなー。なんかあったか？」
「栃木。耳元で騒ぐな、うるさい」
「きゃー、今日はえらく不機嫌だな。奈々枝女史と何かあった？」
「なんでそこで奈々枝さんの名前が出てくるんだ」
「だって、お前の機嫌を左右できる人間なんてそういないだろ？だとしたら思いつくのは奈々枝女史くらいしかいないしなぁ」

栃木が笑ってそう言うと、藤堂は、はぁ、と重たいため息を一つ吐いた。

「なぁ、ひきこもってた人がいきなり外にでかける理由ってなんだと思う？」
「え、奈々枝女史、どっかでかけるのか？」
「だから今日は来るな、って言われた」

夏休みも残りわずかという日、いつものように夏課外に出席して、いつものように空き教室で栃木と藤堂は昼食をとっていた。
藤堂は基本的にポーカーフェイスだ。顔のつくりがもともとそうなのか、それとも意識してまでのことなのかはわからないが、常に微笑んでいるように見える。笑顔で人と壁を作る、それが藤堂という男である。

その藤堂が、だ。

はた目にはわかりにくいが、どこかへにゃりとした表情をしているような気がして、こりゃあ面白くなってきた、とうきうきしたのは藤堂には秘密だ。どうせ、奈々枝女史関連だろうと思ってはいたが、本人から肯定されると、なんだか余計に面白い。

「ひきこもり、っつっても奈々枝女史の場合、理由はないやん。ひきこもってるのに。単にひきこもりたくて、でも普段は授業とかあってできないから、夏休みを理由にひきこもってる、ってだけだろ？だから別にひきこもりをやめるのにもそんな大した理由はないんじゃねーの？」
「そりゃ、そうなんだけど」

言葉の上では納得を示しながらも、どこかすっきりとしない表情を見せる藤堂。こりゃ、つつきがいがある、と栃木がこっそり考えているのは勿論、内緒だ。

「そうなんだけど？」
「ひきこもりの理由はさ、確かに本能だとか言い切っちゃう人だけど、いちど言い出したことをそう簡単に投げ出す人でもないだろ？特にひきこもりのチャンスは今年が最後だ、とか言って気合入ってたし」
「まー、俺は藤堂ほど奈々枝女史に詳しいわけじゃないから、わからんが。でも、確かに変なとこ頑固そうだよな」
「そうなんだよ。頑固なんだよ、あの人。大抵のことはどうでもいいと思っているから、そうでもないんだけど、一度スイッチが入るとすげー頑固。しかもどこでスイッチが入るのかはわからないんだよね」

藤堂はそういうと、今までで奈々枝女史がどういうところでスイッチが入ったのかを、つらつらと述べてみせた。栃木にしてみれば、よくそこまで奈々枝女史を見ているなぁと感心する。
藤堂は、奈々枝女史が他人に興味がない、というけれど栃木にしてみればどっちもどっちだ。藤堂だって他人に興味なんてないだろうし、むしろ面倒だと思っている節すらある。
しかも普段はそう口数も多い方ではないのに、奈々枝女史に関することではそりゃあ喋る、喋る。面白いことこの上ない。

奈々枝女史ってあらためて考えるとすげー。
本当にお前は高校生か、とつっこみたくなるような藤堂をどこにでもいる高校生らしくしたのは、間違いなく奈々枝女史だ。人と人のつながりっていうのはすごい、と思わざるを得ない。
「つか、気になるんなら聞けばいいじゃん。誰と会うのー、って。奈々枝女史のことだから別にふつうに教えてくれそうじゃない？」
「いや、どうだろうなぁ。あの人、案外そういうのこだわらないか

と思いきや、プライベートなことはあんまり話したくないらしいんだよね。プライベートとオフィシャルをわける基準みたいなのもあるらしいんだけど、そこもよくわからん」
「へぇ、つくづくあの人もわかんない人だなあ。ま、でもひきこもりは半分お前が邪魔してるみたいなものだし、別に外出するのが嫌なわけではないんだろうから、外に出たくなってもおかしくはないんじゃないか？ひきこもりに飽きたのかもしれないし」
「だといいけどな」
「なにか心配ごとでもあるわけ？」
「いや、そういうんじゃないけど」
「けど？」

藤堂は持っていたジュースのパックをつぶしながら、実感がわかないのかも、と言った。

「実感？」

同じように栃木ももっていたジュースのパックをつぶす。昼食後のミルクティーは最高だな、と満足しつつ。

「奈々枝さんにも奈々枝さんの知り合いがいるってこと」
「はぁ？そりゃそうだろ。だって大学生なんだし」
「いや、そうじゃなくて。その奈々枝さんが大学生だってことは知ってるけど、なんかそれって想像上の話でしかなくってさ。僕らにとっての高校みたいなものだってこと忘れてたんだよねー」
「つまり、奈々枝さんは自分ひとりだけのものとか思ってたわけ？だっせーなぁ。どんだけだよー」

けらけらと栃木が笑うと、うっせ、と藤堂がそっぽを向いた。随分ガキっぽい仕草だ。

「ま、なんにせよ、奈々枝女史に直接聞くしか方法はないんじゃねーの？」

にやにやと提案する栃木に、藤堂は重いため息を一つ、ついてから、「やっぱりそうだよな」とだけ言った。

## 男子高校生の憂鬱（後書き）

次の話でたぶん、いろいろ展開して収束に向かっていく予定です。
もうしばらくお付き合いください。

## ひきこもりの憂鬱

藤堂はとぼとぼと一人、歩いていた。
いつもならスーパーに寄って、奈々枝宅に向かうのだが、今日はその必要もなく、ぽっかり時間が余ってしまった。とりたてて何かやりたいこともなく、今日に限って宿題もなく、暇である。

奈々枝さん、誰に会うんだろう。誰と会うためだったら、ひきこもりをやめてまで外に出ようと思うんだろう。

そんなことをぼんやり考えていると、いつの間にか藤堂が奈々枝と出会った公園の近くに来ていた。足が無意識に奈々枝の家に向かっていた、というのではない。単にここは通学路なのだ。だから実は朝も奈々枝の家の近くを通ってから学校へと通っている。

公園で熱中症になって奈々枝の家に行くようになってからそんなに日にちは経っていないはずなのに、その前までどんな風に毎日を過ごしていたのか思い出せない。栃木に重症だな、と笑われるのも当然なのかもしれなかった。

そうして、公園を通り過ぎて、奈々枝の住むアパートを通り過ぎようとするとき、ふと、奈々枝の家の方を見てみた。

「奈々枝さんっ」

＋
＋
＋

現在、藤堂はいつものごとく、奈々枝の家にいた。アパートをあの瞬間に通りかかった自分を褒めてやりたいくらいだ。どういうことなのか説明してもらわなければ、この怒りは発散させようがない。

奈々枝の家には、奈々枝だけでなく、見知らぬ男がいた。しかも奈々枝とは随分、親しそうである。奈々枝と男がアイコンタクトを交わしているのを見て、藤堂はますます不機嫌になった。

「説明して」

藤堂の言葉に、奈々枝は誤解しているようだけど、とため息を吐きながら切り出した。

「嘘をつこうと思ったわけじゃないけど、結果的に嘘をついたのは謝る。悪かったな。しかし、本当に今日は出かける予定だったんだ。この男が来なければ、な」

そう言って、奈々枝はきっ、と自分の隣に座って飄々とした顔をしている男をにらんだ。

「この男はまあ、親戚で従兄に当たるんだが。柏崎有志（かしわざきゆうし）という名前を聞いたことはないか？」
「柏崎、有志？」
「ああ。まあしかし男子高校生が知らなくても当然かもしれないな。この男はな、こう見えて実は結構有名なピアニストなんだよ」
「はは。お褒めいただきありがとう。柏崎有志です、よろしく」
柏崎は爽やかに笑うと、右手を差し出してきた。藤堂としてはよろしくしたくない相手だが、礼儀は礼儀だ。一応、軽く握手をする。
「君のことは、ナナから聞いて知ってるよ。藤堂くんだよね？ずっと会ってみたいと思ってたんだ。そしたらナナがそれはダメだっていうからさー。仕方ないからナナの家に突撃訪問してみましたー」
「奈々枝さんは柏崎さんと会うから、今日は来るなって言ったの？」
「そうだよ～？」

藤堂は奈々枝に質問したつもりだったのに、答えたのは柏崎だった。そのことにイライラする。奈々枝も藤堂の苛立ちに気が付いたのだろう。大きくため息を吐いて、今日は帰れ、と言う。
「説明はちゃんとするし、聞きたいことには答えるから、今日は帰れ。有志がいないところで説明してやるから」
「柏崎さんがそんなに大切なの？」
「というか単純に有志には用事があるんだ。そもそも用事があったから有志と会うことになっただけだし」
「俺、今日ここ泊まっていいー？」
「お前はちょっと黙っていような。ついでにダメだ。さっき真樹（まさき）に連絡したから夜迎えにくると思うぞ」
「げっ、なんでそんなことを」
「とりあえず、お前は黙っとけ。でないと話が進まん。ええとすまんな、藤堂。用事がなんなのかというのはわたしだけじゃない人間

のプライベートにかかわるから言えないが、それ以外については説明すると約束しよう。だから今日は帰れ」

奈々枝の説得に藤堂はしぶしぶ頷く。帰ることを承諾しなければ、次回から本気で家に入れてくれなくなるのではないか、という不安を感じたためでもあるし、用事がある、と奈々枝が言ったからには、本当に用事があるのだろう。それを藤堂のわがままで邪魔したりなどはしてはいけないのだ。そんな権利など藤堂は持っていないのだから。

「約束だよ。明日、説明して。僕の質問にちゃんと答えて」
「ああ、わかった。というわけで明日な」
「うん」

後ろ髪引かれる思いで藤堂は奈々枝のアパートを後にした。

＋　＋　＋

「あらま、帰しちゃって本当によかったの？」
「それをお前が言うか。どうせ今日わざわざこっちに来たのもそれが目的だろうに」
忌々しそうに吐き捨てる奈々枝に対し、そうだよ、と有志はからりと笑う。
「それで用事ってなにさ」

「真樹と由梨絵さんが結婚するらしいな」
「なんで、それを」
「当然だろう。真樹はお前の兄でわたしの従兄だぞ？連絡をとってないとでも思っていたのか？しかも由梨絵さんはわたしの部活の先輩なのに？わたしと由梨絵さんが仲が良いということだってわかっていただろうに」
「お前は案外面倒くさがりだから連絡とってないかと思ってた」
有志の吐き出した言葉を奈々枝は無視した。そうして、まだだめなのか、と聞く。

「まだお前は引きずっているのか」
「忘れられるとでも？」
「いい加減、諦めろ。お前が由梨絵さんを追い求めたとしてもあの人はお前に振り向いたりしないよ」
「そんなことわかっている！」
奈々枝の言葉に有志は語気を荒くした。
「そんなことわかってんだよ。だから留学だってしたし、新しい彼女だって見つけようと」
「本気でお前が新しい彼女を見つけようとしたとは思わんがな」
「慰めてはくれないのか？」
有志の言葉に奈々枝は、「お前と寝たのは間違いだったな」とだけ言った。

## ひきこもりの憂鬱（後書き）

急展開です。次回から奈々枝さんサイドの話になります。

## ひきこもりの思惑

「間違い、か。ならなんでナナは俺と寝たわけ？」
有志の言葉に奈々枝は重いため息を吐いた。
「聞きたくもないくせに、聞くな。そうやって聞きたい言葉だけを引き出そうとするから引きずるんだ」
「手厳しいね」

奈々枝は有志をちらりとにらむと、部屋の一角を占領している本棚から一冊だけ抜き出すと、読まずに机の上に置いた。
そうして思い出すのは、過去だ。まだ有志も奈々枝も高校生だった頃。奈々枝が有志と寝たのはしとしとと雨の降る六月のことだった。

あの日だけでなく、それ以前から有志は精神的に参っていた。
有志は兄真樹の彼女である由梨絵にずっと片思いをしていた。由梨絵と真樹、それに有志は幼馴染のようなもので、真樹と由梨絵は高校に入ったのをきっかけに付き合い始めたらしかった。
いつから有志が由梨絵を好きだったのかはわからない。奈々枝には興味もないし、付き合いもなかったからだ。奈々枝が由梨絵を直で知ったのは、高校に入ってのことだった。

当時から、どちらかというとインドア派な奈々枝だったが、体を動かすこと自体は嫌いではなかったし、中学時代からずっと陸上をやっていたので、高校でも迷わず陸上部に入った。そして陸上部のマネージャーだった由梨絵と仲良くなったのである。

有志としては相談できるのは奈々枝しかいなかったのだろう。真樹や由梨絵のことをよく知っていて、かつ有志を甘やかしてくれる年下のいとこ。当時すでにピアニストとして注目され始めていた有志は、友人が少なかった。音高に進めばよかったのに、かたくなにそれは嫌だと言い張った有志は、真樹のいる進学校、つまり奈々枝と同じ高校に入っていた。有志が高校を決めたとき、不思議に思わないわけでもなかったけれど、思春期らしいなにか理由があるんだろうと勝手に納得していた。実際のところ、その理由は正しかったのだけれども。

有志は、由梨絵が真樹と付き合い始めたのを知っていた。それはそうだ。三人は幼馴染な上に、真樹は有志の兄だ。わからないはずがない。それでも、近くにいたい、と有志はそう考えたらしい。

繊細なエゴイスト。

それが有志だ。奈々枝とは全く違う精神構造を持つひと。

あの日、奈々枝は有志の愚痴を聞いていた。由梨絵がどれほど素晴らしくて、どれほど有志が由梨絵を好きなのか、など。奈々枝は相槌も打たず、外を見ていた。相槌なんて有志が求めていないことなんてとっくに知っていたからだ。むしろ、奈々枝はなぜ、こうも自分が有志の愚痴を律儀に聞いてやっているのだろうか、と疑問に思っていた。ボランティア精神にあふれているとは思ってなかったけれど、案外、自分は懐が深いのかもしれない、そんなことを堂々

と考えていたのである。奈々枝も若かったのだ。

奈々枝は有志のベッドに座って、外を見ていた。

有志の部屋の窓からは、家の裏手にある雑木林が見える。雑木林が近いせいで、夏場などは多くの虫に遭遇するが、それを除けば、雑木林が部屋の窓から見えるというのは魅力的だった。緑というものは落ち着くものだ。

と、有志は話しているうちに感極まってきたのか、いつの間にか泣いていた。

さすがにこれには驚かざるを得ない。奈々枝にしてみれば、恋愛ごとで泣くなんてことは本や映画のなかの話で、実際に泣く人がいるなんて思ってもみなかったのである。

とりあえず、サイドテーブルにあったティッシュの箱を渡し、顔を洗ってくるように告げると、有志はこくん、と頷いて部屋の外へと出て行った。なんとなくそのことに安堵する。

部屋に有志が再び戻ってきたとき、幾分かさっぱりした顔をしていたので、涙を流すというのも有効な手段なんだな、と奈々枝は思ったものだ。なのに、押し倒されるとは。

押し倒されて反撃行為に出なかったのは、ひとえに面倒だったし、別にいいか、と思ったからだ。奈々枝はよく人とずれていると言われるが、貞操観念についても彼女はちょっとずれていた。

一度寝てしまえばずるずるいくものだ。

有志が高校を卒業し、本格的な活動拠点をヨーロッパに移すまでの二年、二人の関係は続いた。

「で、結局お前はどうしたいんだ？」
「どう、とは？」
「さっさと由梨絵さんをあきらめるのか、それともあきらめないのか。どっちでも別にわたしは構わんが。うちに来た理由もさっさと話せ」
「久しぶりに会いたかったから、じゃダメなのかな？」
「駄目に決まっているだろう。本心でもないくせにそういうことをほいほい言うからいかんのだ」
「じゃあどうしろと？」
「逆ギレするな。鬱陶しい」

まるで虫けらを見るかのような目つきに、有志はひるむ。昔からこの年下のいとこには勝てたことがない。相談相手が年下なんてなんだか微妙だけれど、有志のことをよくわかってくれ、かつ、無限ループする愚痴を相槌一つ打たず、静かに聞いてくれるのは、この年下のいとこしかいないのだ。

「あきらめるにはどうしたらいい？」
「新しい恋でもすればいいんじゃないか？そもそもそれをわたしに聞くのは間違っていると思うぞ。初恋もまだなんだから」

## ひきこもりの優しさ

「は？今、なんて言った？聞き間違いだよね？」
きょろきょろと先ほどまでとは打って変わって、挙動不審な動きをする有志を奈々枝は、こいつ馬鹿か、と言わんばかりの目つきで見ている。しかし、そんなことにめげている場合ではない。この年下のいとこは今、ものすごいことを言わなかったか？

「初恋もまだ、とか言った？」
おそるおそる、奈々枝をうかがいながら質問する。
「言ったな。何をそんなに驚くことが？」
「いや、ナナちゃん、ナナちゃんあなたいくつよ？成人迎えたいい大人が初恋もまだなんてないでしょ？年上の男のひとにドキっ、とかなかったの？」
「初恋がまだだ、というだけでなぜ有志がそんなに必死になってるのかわからん。年上の男なぁ。興味ないな」

有志は愕然とする。
おかしな子だとはずっと思ってたけれど、ここまでとは。
奈々枝は有志の動揺に気付かず、なおも平然と続ける。

「だいいち、有志も年上だけどへたれだし、何年も由梨絵さんに片思いしてるくせに、あっさり真樹にもってかれてしかも結婚も決まってもなおぐだぐだわたしに愚痴を言いに来るような男を間近で見ていたら恋愛にも興味が湧かないと思わないか？」
「すいませんでしたー」

有志にできることはもはや謝り倒すことのみ。とりあえず土下座しておく。奈々枝にしてみれば、有志の土下座など何度見たことか。

あまり価値のあるものではない。

「まあ、冗談はともかく」

「冗談やったんか！よかったー、ってことはナナ、初恋くらいはあるんだよね？」

「どこからどこまでが冗談かは秘密だがな。冗談は真実を混ぜてこそ面白いというものじゃないか？」

「いやいやいや、あのさ、ナナ、そこはさはっきりさせて…」

「わたしの初恋がまだかどうかは本題じゃないし、有志に関係ないだろう。それはどうでもいい。とにかく、だ。問題はお前がさっさと由梨絵さんにフラれてくるべきだ、ということだ」

「フラれるも何も…。だって結婚も決まってるし、事実上、フラれたようなものじゃん」

「そうやって後ろ向きでうじうじしてるから、今までずっと片思いだったんだろう？一回すっぱり言って、はっきりフラれてこないと、お前、終われないだろ？どうせお前だって、わたしにそう言って欲しかったからこそ、うちに来たんじゃないのか？」

奈々枝をまっすぐ見れなくて、有志は顔をそらす。この年下のいとこは最後の最後で有志に優しい。有志が望んでいる言葉をくれる。

「あーあ、どうして由梨が好きなんだろうな。ナナを好きになればよかった」

「それはごめんだ。お前みたいなのが彼氏なんてぞっとする。そこまでのボランティア精神はないからな」

「なんだよー、ちょっと言ってみただけじゃん。そんなにぼろくそ言わなくてもさー」

「ふんっ。馬鹿の考え休むに似たり、というやつだな。まあ、有志の場合、悩んでいるとすぐに音に出るから気をつけろよ。来月からまたヨーロッパなんだろ？」

「よく知ってるね」
「真樹や由梨絵さんがお前のこと、心配してたからな」
「ナナは心配してくれなかったの？」
「この甘ったれめ。心配してたわけないだろう。わたし以外にも心配してくれるやつは大勢いるのだから、わたしの心配など不要というものだ」

話は終わりだ、といわんばかりに奈々枝は立ち上がり、キッチンへと向かう。どうやら夕食を作るらしい。

「そうそう、真樹が迎えに来て、由梨絵さんと5分間だけ二人にしてくれるそうだから、その間にきっちりフラれてこいよ」
「えっ、5分？たったの？みじかいよっ」
「知らん。真樹に言わせると、それが限界だそうだ。5分過ぎると真樹が部屋に乱入するつもりらしいから気をつけろよ」
「ひでー」
「そんな事態になったのも有志がうだうだしてたせいだろ。夕食は作ってやるからそれを食べたら、さくっとフラれてくるんだな。そしてさっさと寝ろ。明後日はリサイタルだろ」
「ちえっ。泊めてくれてもいいのに」
「泊めるとお前は際限なくダメダメになると学んだからな。お前を甘やかすと碌なことがない」
「ひどいなぁ」
「どっちが」

それきり、奈々枝は何も言わなくなった。おそらく料理に集中しているのだろう。奈々枝は昔からそうだった、と有志は思い出す。
結局、有志が奈々枝のところを訪れたのは、奈々枝が有志の欲しい言葉をくれるとわかっていたし、そろそろ由梨絵への思慕を断ち切りたいとどこかで願っていたからでもある。由梨絵と二人きりに

してくれるよう真樹に頼んだのもきっと奈々枝だろう。そういうフォローを奈々枝は忘れないのだ。

あーあ、と思う。

ずいぶん長い間、由梨絵に片思いしていた。真樹と由梨絵が付き合い始めてからも、ずっと諦めきれなかった。今でも好きだ。由梨絵が好きだと言ってくれるならなんだってできると思う。

だって、好きなのだ。理由なんてない。好きだとしかいえない。ずっと、ずっと好きだった。

奈々枝は有志の気持ちなんてお見通しなのだろう。結局、なぜ有志が奈々枝の家を訪れたかというと、落ち着いて考えたかった、というのもある。

潮時、なのだ。いろいろと。

## ひきこもりの優しさ（後書き）

もう一人の主人公であるはずの藤堂がまったくでてこないとうまさかの事態。
次回からはまた藤堂が出てきます（たぶん）。

## 高校生の爆発

「で、なんでお前はそんなに落ち込んでんの？」
「ほっとけ」
青少年に悩みはつきものなのです。

＋　＋　＋

藤堂は急いでいた。
それこそチャイムと同時に教室を飛び出し、誰より早く靴箱にたどり着き、あとはひたすら奈々枝の家を目指す。藤堂の走りを運動部の誰かが見ていたならば、スカウトされたかもしれない。それくらい素晴らしい走りだった。

「奈々枝さんっ」

ドアの呼び鈴を連打し、ドアをごんごん、と叩いたところで、聞こえてると言いつつ、奈々枝が顔を出した。
「わかっているから、少し落ち着け。今日のアイスティーは珍しくフレーバーティーだぞ」
「そんなことより」
「そんなことではないわ。馬鹿者。話は逃げんのだから、まずは落ち着け。今日のな、フレーバーティーはなかなか珍しいものでな、知人がわざわざ持ってきてくれた貴重なものだぞ？それをふるまってやるというのだから、むしろ感謝してもらってもいいくらいだ」

確かにのどは乾いていたし、冷静になる必要があると思った藤堂は、アイスティーを一口含む。さすが興味のあることにはまっしぐらな奈々枝が貴重だというだけあって、美味しい。

藤堂がアイスティーを飲み、落ち着いたのがわかったのか、奈々枝が、まず何から話そうか、と言った。

「本来であれば、わたしから説明するのがいちばんいいのだろうが。藤堂が何を聞きたいと思ってるのかわたしにはわからないので、できれば藤堂が質問して、それにわたしが答えるという形をとるのはどうかな」

藤堂はこくりと頷く。そうして、アイスティーをまた口に含んでから質問を切り出した。

「昨日来てた柏崎さんは一体なんの用事だったの？」

「また難しいことを聞くな。なんといえばいいのか。昔話にケリをつけにきた、という感じかな。あの男はな、わたしより一つ年上なんだが、これがまたうじうじした後ろ暗いところがあって。一人じゃ決心できないっていうんでわたしが背中を押したんだよ」

「奈々枝さんが昨日、外出する予定だったのは、柏崎さんのため？」

「まあ、そうともいえるし、わたし自身のためともいえるな。わたしはずいぶん、あの男を甘やかしてきたと反省していてな、有志との関係をはっきりさせるという点においてはわたし自身のためでもある」

「甘やかしていた？」

「ああ。詳細を語ると他人のプライバシーにひっかかるからこれ以上のことは言えないがな」

「柏崎さんは奈々枝さんにとって特別なの？」

「従兄だからな」
「従兄以外の関係ではなかった？」
「質問の意図がわからん。従兄は従兄でそれ以外はないだろう？」

心底不思議そうに聞く奈々枝に、何と答えればよいものか、と藤堂は頭をめぐらせる。

昨日、藤堂が見た二人はとても仲が良さそうだった。いくら年が近い従兄だからといって、あんなに仲が良いものだろうか、と思うのだ。

事実、藤堂には同い年のいとこがいるものの、彼とは仲が悪いわけではないが、仲が良いというほどでもない。お互い、正月や盆に会えば話すものの、とりたてて普段から連絡を取ったり、ということはしない。だから奈々枝が言っていることが正しいのかいまいち判断がつかないのだ。

この時点で、藤堂は痛恨のミスをしていたのだ。本人が気づいていなかっただけで。

いつものように冷静であったならば、彼はそれに気が付いただろう。奈々枝はめったなことでは嘘はつかない、と。

奈々枝の言葉が少ないのは、それだけしか嘘なしで言えることがないからだ。

どちらかというと奈々枝は嘘を言うのが好きではなかった。嘘を言うのが苦手、というわけではない。むしろ得意である。得意であるがゆえに嘘をついていいということにはならない。人と向き合うのに誠実さは必要である、と奈々枝は考えていたし、先日、藤堂がなぜか傷ついた表情を見せていたことから、嘘を言ってはならない、と自分を戒めてすらいたのだ。普段の藤堂であれば、奈々枝が誠実に藤堂を向かい合おうとしていることくらい気づけただろう。彼は決して愚鈍ではなく、観察眼に優れているのだから。

ところが。
やはり、昨日のことが大きなショックだったのか、自分では冷静になっているつもりで、実のところ冷静ではなかったのだ。絶賛空回り中だったともいえる。
だからだろう。
あんな一言を言ってしまったのは。

奈々枝は藤堂が何を聞きたいと思っているのか把握しきれずにいた。奈々枝は有志をずっとそばで見てきていたので、男というのは理解不明な生き物だ、という固定観念があった。藤堂をやむなく家に招き入れ、会話を交わすようになると、ますます男という生き物は女とは別の世界で生きているらしい、とも。奈々枝の友人に言わせると、奈々枝の方が理解不能らしいが。
それはともかく。
奈々枝は困惑していたのである。
藤堂に質問させれば、彼の聞きたいことがわかるだろうと思って提案したのだが、むしろ余計に何が聞きたいのかわからなくなってしまったような気がする。しかも図体だけは奈々枝より大きい藤堂が小動物のようにだんだん見えてきてしまったのだ。年下、というのは案外世間的に使えるスキルなのではないか、と考えをめぐらしていたところに、藤堂が思いつめたように、付き合ってたとかはないよね、と聞いてきた。
「柏崎さんと付き合ってたことがある、とか元カレ、とかじゃないよね？」
付き合ってた、というのと元カレ、というのは同義語じゃないか、と言いたいのをぐぐっとこらえて、そうだなぁ、と口を開く。
「付き合ってたことはないが。そういうのであれば、セフレという

のには少し近かったかもしれんな」

奈々枝のこの言葉が起爆剤となった。

そして、藤堂はこんなことを言った自分をずっと後悔することになる。自分はもっとできる男だと信じていたのに、と。

藤堂は言い放った。奈々枝に向かって、まっすぐに。それは奈々枝も予期せぬひとことだった。

「あんな男やめて僕にしなよ！」

## 高校生の爆発（後書き）

自分で書きながら思いました。どこの昼ドラか、と。奈々枝さんもきっとびっくりしてるはず。

## 賭けの行方　その１

奈々枝はここにいない有志を心底恨んだ。あいつは、疫病神なのか。

藤堂の精一杯の告白らしきものに対し、奈々枝はどうこたえるべきか迷っていた。

本心を言っていいなら、ありえない、だ。

だって、なにせ高校生。一方奈々枝は一応成人した大学生だ。大学生と高校生ならアリじゃない？と思う人もいるかもしれない。だが、考えてみて欲しい。相手は高校生。そして奈々枝は大学生。高校生といえば本能まっしぐらな時期だ。奈々枝と有志が寝たのも高校時代。つまりは、そういうこと。奈々枝は面倒くさがりなので、押し倒されたらたぶん、抵抗しない。そこに情愛があるかどうかは別として。

問題は、要するに淫行条例とかにひっかかる可能性がある、ということなのだ。

この淫行条例とかいうやつはなかなかに曲者で、都道府県によって条例のなかみは異なるものの、二十歳以下と性行すれば速攻アウト、なんてとこもあったりする。そこに真摯な理由があろうがなかろうが問答無用、なのが怖いところだ。まあ、どの条例かにもよるけれど。

そうなったら大変面倒である。

淫行条例でしょっ引かれる可能性はそう高くはないだろうが、それでもその可能性があるのだから絶対逮捕されないということはない。そんなことになったら目も当てられない。

つまり、冗談じゃない、というのが奈々枝の本音なのである。

しかし、その一方で、うっかり言ってしまった感じなだけに、さきほどの言葉は藤堂の本音なのだろうと推察される。

その本音に対し、「面倒だ」と却下するのは、年上としていかがなものか、とも思うのだ。

本来、年上たる奈々枝は年下たる藤堂を教え導く存在であるはずで、彼を傷つけることは年上としてやってはならないことだと思うのだ。

つまり、面倒だという本音は間違いなく藤堂を傷つける。それは人として最悪だろう。

うーん、と奈々枝はしばし考えた。

そうして、一息吐いてから、慎重に言葉を吐き出した。

「藤堂が何を考えているのかまではわからんが。少なくともわたしが有志とそういう関係にあったのは高校時代の一部で、高校を卒業してからはそんなことないぞ？そういう関係がないのにいまだ連絡を取っているのは、従兄だというのと、あとは有志とわたしは同じ高校だったせいで、共通の知人というのが存外多くてな、それでまあ連絡を取り合うことがあるだけで」

だから、有志の代わりとか言われても困る、と奈々枝にしてははっきりしない口調で答えた。

藤堂は奈々枝の言葉にどうしたらいいのかわからず、下手すると泣きそうでもある。藤堂は自分の口から出た言葉に驚いてはいたものの、それが本心だと、奈々枝の特別になりたいのだと、すとん、と理解していた。

しばしの沈黙が二人の間に流れる。

藤堂は深呼吸を何度か繰り返した。

自分がらしくもなく焦っているのにはさっきから気が付いている。焦っていては、奈々枝さんに対抗できないとわかっていたはずなのに、やはり自分はまだ未熟なのだ。しかし、未熟だからとその地位に甘んじていては奈々枝の特別には到底なれないだろう、ということもまた彼は自覚していた。

「じゃあ今すぐじゃなくてもいいから、これからそういう対象に見て」

まっすぐ奈々枝を見て、そう言い放つ。奈々枝には真正面から切り込んだ方が得策だと長くはない付き合いのなかですでに藤堂はわかっていた。

これにため息を吐きそうになったのは奈々枝だ。

どうしてそうなる、というのが奈々枝の心境。

「えーと、藤堂は今、混乱しているんじゃないかと思うんだ。だから日を改めてまた考えなさい」

「それは僕の気持ちが勘違い、って奈々枝さんは思ってるってこと？」

「そうじゃない。その可能性も否定できなくはないが、少なくとも

藤堂はわたしにわたし自身の交友関係があるとはあまり実感していなかったんじゃないか、と思ってな。それを目の当たりにして混乱する、というのはあるだろう？とくにわたしはひきこもりなわけだし。いつも藤堂が課外が終わってここに来たら、わたしはいたわけだから、わたしの世界がここしかないと見えても仕方がないんじゃないか、とな」
「そんなこと」
「ない、と言い切れるか？」
「もちろん」
「とにもかくも、わたしは今、そういう相手を募集していないし、特に必要だとも感じない。だから藤堂の気持ちが本当であってもわたしはそれに応じることはできないよ。戯れに体を重ねることはできても事態を悪化させるだけだと学んだんでな」
「だけど、これからはわからないじゃないかっ」
「そうだな、藤堂の言うことにも一理ある。未来は誰にもわからないな」
「だったら」
「それでも、だ。それに藤堂には前、わたしは9月まで夏休みでその間中引きこもっているつもりだ、と言ったな？」
「うん」
「予定が変わった。夏休みは大学の公式なスケジュールだから変わらんが、わたしのひきこもりは8月までで終わりだ。そのあと、ちょっくら留学してくる」

## 賭けの行方　その２

「は？留学…？」
「そうだ」

あまりにも奈々枝がさらっというので、聞き間違いかとも思ったがそうではないようだ。
というか、留学？留学というのはあれだ、日本ではない海外で学ぶとかそういう。

「どこに？」
「フランスだな。とはいえ、そう長いものでもないし、留学というよりも語学研修というのに近いかな」
「ごがくけんしゅう」

藤堂の優秀な脳みそはパニックを起こしているらしい。奈々枝の言葉をうまく理解できない。
それでもとりあえず、今までのようには会えないのだ、ということを理解して何とか質問を紡ぐ。

「どのくらい行くの？」
「１０月から後期が始まるからちょうど一か月といったところだ」

奈々枝の言葉に藤堂は少しだけほっとした。
ようやく自分の気持ちがはっきりしたのに、一年留学するとか言われたらどうすればいいのかわからないではないか。一か月、というのならまだ我慢できる、ような気がする。

「てか、奈々枝さんさ、国文学やってるんだよね？」

「まあ、そのようなものもやってるな」
「だったらなんで留学？そしてフランスを選んだ理由は？」
「国文学をやってるからといって留学しない理由にはならんだろう。日本を離れてみるなんてこと学生の方がしやすいし、フランスを選んだのは、たまたま、というかツテがあったからだな」
「ツテ？」
「そう。昨日有志がここに来たのもひとつはそれが理由でな。あいつ、今、フランスに留学してるんだ。それでどうせなら、ってことでな」

有志の名前が出てきたことに思わずむっとしてしまう。自分でもガキっぽいと思うのだけれど、そう思ってしまうのだから仕方がない。

「っていうか、そんな簡単に留学ってできるものなの？」
「語学研修だからな。正式な留学ならもっと面倒な手続きがあるらしいが、語学学校に入るのはそう大変なことではないよ。しかも有志がいるから彼に手続きはやらせればいいし。パスポートをとるのに少し時間がかかるくらいだな」
「へぇー。ってなんか違う！」

藤堂の突っ込みに奈々枝がちょっと驚いた顔をした。こういう顔は珍しいな、と藤堂は思いつつも話を続ける。

「あっさりしすぎだよ！留学ってもっとこう、さ、いろいろあるものじゃん。それに海外だよ？日本語通じないんだよ？そんななかでひきこもりたいとか言ってる奈々枝さん、生きていけんの？」
「それは行ってみないとわからないだろう」

大して憤慨した様子も見せずに答える奈々枝に藤堂は肩を落とし

た。
そうだ、奈々枝さんはこういう人だった、と。大人げないというか落ち着いているくせに考えが足りないというか。だから一緒にいて楽だったんだけど。

「でもさぁ」

なおも言葉を続けようとした藤堂を奈々枝が遮って、もう決まったことだから、と言う。

「もうやめます、とはいえない段階でな。飛行機のチケットもとったし、語学学校にも金を払ってしまったんだ。それにたった一か月だぞ？言葉がしゃべれなくてもボディランゲージはできるから大丈夫だ」

だからどうしてそう自信満々なんだよ、と藤堂は内心で突っ込むものの、声に出していう元気はすでにない。奈々枝と知り合ってから藤堂が奈々枝を振り回すこともなくはなかったが、たいていは奈々枝に藤堂が振り回されている気がする。

「ひきこもりはもういいわけ？」
「いいも悪いもないな。予定は常に未定。ひきこもりの野望は達成できなかったが、それはそれ。何の問題もない」

きっぱりと言い切る奈々枝を見て、ああ、この人、別にフランスでも問題なさそう、と藤堂は思う。フランスなんてパンがおいしそうなイメージくらいしかないけど。

と、そこではっと気づく。
フランス？

フランスといえば、愛の国！きっと金髪碧眼があふれていて、女性を口説くのだって慣れているに違いない。そんなとこに奈々枝さんを放り込むなんて、オオカミの群れに羊を放り込むのと同じこと。危険すぎる！

「駄目だよっ、語学研修はともかく、フランスなんてダメ！」
「なんで？」
「だって、フランスだよ？フランスといえば愛の国！日本人はちっちゃいからすぐナンパされるってこの間、テレビで言ってた！」
「どんなテレビを見てるんだ。それにフランスがダメならドイツはいいのか？」
「ドイツ、ドイツねぇ。あれでしょ、ドイツといえばビール。ビールといえば酔っ払い。酔っ払いに絡まれる奈々枝さん。だ、ダメ！ど、ドイツも危険すぎる！」

藤堂の言葉に奈々枝は思いっきりため息を吐いた。自分が高校生だったときも、こんな思考回路をしていただろうか？

「あのな、一つ訂正しておくが、ドイツでビールが好んで飲まれるのは主にミュンヘンあたりで、ドイツ全体がビールばかり飲んでいるわけじゃないぞ」

## 賭けの行方　その２（後書き）

奈々枝さん、つっこむとこそこなんだ？（笑）

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

---

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8511w/

---

ひきこもりと男子高校生

2011年11月18日06時49分発行